

底魚資源調査（冬季）を実施しました

水産試験場では、本県沖の主要な底魚類の資源動向を把握するため、H15年から調査船いばらき丸(218t)により年2回（夏季、冬季）の着底トロール調査（オッタートロール）を実施しています。本調査では、本県沖の水深75～450mまでの海域、合計29定点において、15～30分間（速力3～4ノット）網を曳き、面積密度法により本県海域の現存量を推定しています。今回はR7年11月に実施した冬季調査結果についてお知らせします。なお、今回は調査船ドックの都合により、例年よりも早い11月に調査を実施しました（例年は12～1月に実施）。

1 主要な底魚類の推定現存量の推移

H28年度から今年度までの推定現存量の推移を下表に示しました。資源水準については過去20年の調査で推定された現存量と比較して、今回の現存量が上位75%以上であれば高位、25%以上75%未満を中位、25%未満を低位としました。ヒラメ、マコガレイ、ムシガレイについては浅海域における現存量を正確に評価できないため、「茨城県産重要魚類の生態と資源」（令和7年3月更新、水試ホームページ）で報告している資源水準としました。

漁獲対象種の増減傾向を直近5年間の推移から判定した結果、増加傾向にあるのはアオメエソ（めひかり）、ユメカサゴ（のどぐろ）の3種、横ばい傾向にあるのはマガレイ（沖まこ）、ミギガレイ（にくもち）、ヤナギダコの3種、減少傾向にあるのはヒラメ、ヤナギムシガレイ、ババガレイ（なめた）、アカガレイ（赤がれい）、マコガレイ（本まこ）、ムシガレイ、エゾイソアイナメ（どんこ）、マダラ、アカムツ、キチジ（あかじ）、マアナゴ、マトウダイの12種でした。その他、漁獲対象とはなっていないトラザメ（ねこざめ）は横ばい傾向、テナガダラ（とうじん）は減少傾向でした。

表 現存量の推移(冬季トロール調査)												(単位:トン)		
魚種/年度		H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7	傾向	水準	過去10年 平均
漁 獲 対 象 種	ヒラメ	310	261	221	247	181	156	253	125	2	11	減少	中位	177
	ヤナギムシガレイ	46	37	52	57	32	65	61	75	40	31	減少	低位	50
	ババガレイ(なめた)	25	32	39	10	20	16	38	54	4	8	減少	低位	25
	アカガレイ(赤がれい)	94	66	73	51	85	25	9	3	0	0	減少	低位	41
	マコガレイ(本まこ)	46	26	25	31	3	6	6	7	3	0	減少	低位	15
	マガレイ(沖まこ)	13	5	6	8	0	0	0	0	0	0	横ばい	低位	3
	ムシガレイ	248	187	416	324	327	406	409	391	103	244	減少	中位	305
	ミギガレイ(にくもち)	26	56	24	52	41	17	48	64	28	34	横ばい	中位	39
	ヤナギダコ(水だこ)	105	122	104	74	102	88	54	99	102	42	横ばい	低位	89
	アオメエソ(めひかり)	14	173	30	28	7	370	57	77	101	504	増加	高位	136
	エゾイソアイナメ(どんこ)	577	347	401	223	1,033	402	188	361	164	171	減少	中位	387
	マダラ	156	68	63	22	7	7	6	9	5	0	減少	低位	34
	アカムツ	1	3	2	3	1	36	14	15	3	12	減少	中位	9
	ユメカサゴ(のどぐろ)	11	32	17	45	11	20	23	59	34	49	増加	高位	30
	キチジ(あかじ)	117	102	71	119	72	38	27	26	14	6	減少	低位	59
参 考	マアナゴ	36	80	60	59	42	145	20	35	24	19	減少	低位	52
	マトウダイ	17	20	86	76	47	30	38	35	19	17	減少	低位	38
	トラザメ(ねこざめ)	3,271	1,843	3,183	2,697	3,465	1,697	6,230	2,623	207	4,342	横ばい	高位	2,999
	テナガダラ(とうじん)	1,154	3,046	3,588	1,582	2,727	2,190	2,340	213	637	231	減少	低位	1,852
	スルメイカ	5	4	6	23	19	12	2	9	22	31			13

2 今年度と昨年度調査結果の比較

昨年度と比較して、増加傾向の魚種数は増えましたが（1種→2種）、減少傾向の魚種数も増加しました（8種→12種）。今年度は減少を示す魚種が多くなり、底魚類の資源状況には注視が必要です。また、スルメイカの推定現存量を参考に示しましたが、底曳網漁業の漁模様と同じく増加傾向でした。しかし、現在の調査では現存量を過小に評価してしまうことから、今後は現存量を正確に推定する手法を検討していきます。

これらの増減要因を解明していくため、水産試験場では今後も資源動向のモニタリングを継続していくとともに、資源の持続的な利用に向けて調査研究を進めていきます。

3 似ていて紛らわしい魚 ―カナガシラの仲間たち―

底魚資源調査では、市場に水揚げしない小型サイズの漁獲物も持ち帰り、計数・測定を行います。時には似ている魚がいくつも混じることがあり、カナガシラ類がその典型です。カナガシラ類の中でも、カナガシラのほか、ソコカナガシラ、カナド、オニカナガシラの4種がよく含まれます。胸鰭の模様や顔の先端の棘の形などで見分られますが、外観は互いにそっくりな上に（図1）、実際の現場では鰭が寝ていたり欠けていたりして、同定に迷うことが多々あります。精度の高い資源量推定のため、このような魚も見誤らないよう、正確な種同定を心がけています。



図1 底魚資源調査で採捕されるカナガシラの仲間 (A: カナガシラ *L. microptera* ; B ソコカナガシラ *L. abyssalis* ; C : カナド *L. guentheri* ; D オニカナガシラ *L. smithii*)

4 ナガレメイタガレイの色彩変異個体

通常の体色とは異なる色彩を示す個体を「色彩変異個体」と言い、いくつかの魚種で稀に出現することが報告されています。ここでは、冬季の底魚資源調査において採捕されたナガレメイタガレイの色彩変異個体をご紹介します。本県沖でもよく漁獲されるナガレメイタガレイは、通常は眼のある側（有眼側）が茶褐色、眼のない側（無眼側）が白色をしています。この個体は有眼側に通常の色を残しつつも、大部分が色素を欠いた白色となっています。他方、無眼側は大部分が通常どおりの白色ですが、背鰭と臀鰭の基底に沿うように有眼側のような茶褐色の模様が出現しています。この変異がなぜ生じたのかは分かりませんが、少なくとも当場の調査では確認例がなく、珍しいことは間違いなさそうです。貴重な標本であることから、この個体は国立科学博物館（NSMT）に登録・収蔵していただきました。

（定着性資源部 多賀・外山・水谷・西）

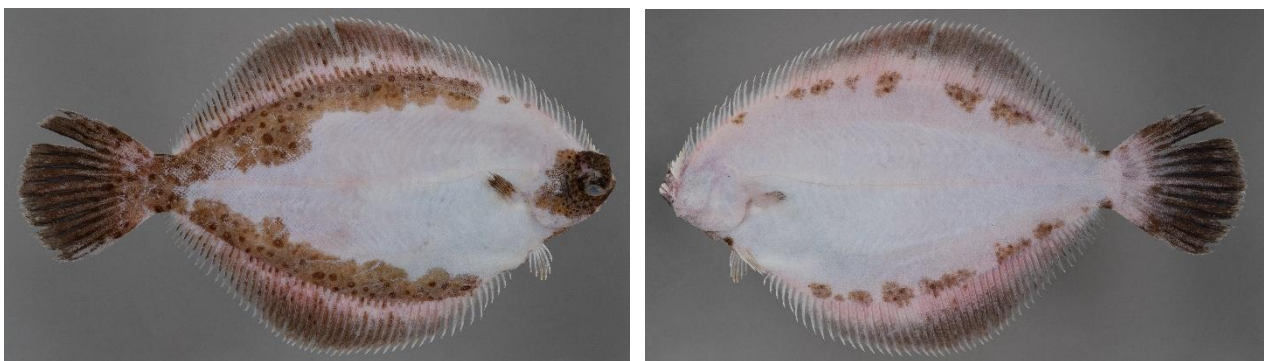


図2 底魚資源調査で採捕されたナガレメイタガレイ *Pleuronichthys cornutus* (NSMT-P 154093, 体長 148.3 mm, 波崎沖水深約 100 m, 2025 年 11 月 27 日)

次回の水産の窓「ヒラメ資源状況」は2月20日の発行を予定しています。